

# 女性労働者のケイパビリティに関する事例研究

## －雇用形態の違いに着目して－

山 本 咲 子

### 1. はじめに

少子高齢化を背景に労働力確保のために女性活躍推進が掲げられ、働く女性は毎年増加している。しかし、大きく増加しているのは正規雇用者ではなく非正規雇用者であり<sup>1</sup>、女性雇用者の雇用形態別の割合は、正規44：非正規56となっており、正規雇用者が非正規雇用者を上回ることはない（総務省統計局，2020）。

女性非正規雇用者の年収の分布を見ると、100万円未満が42.6%、100～199万円未満が38.9%である。81.5%の女性が年収199万円未満に留まっており、300万円以上は4.9%に過ぎない。年収199万円未満では、生活に困難が生じるであろう。一方、女性正規雇用者の年収分布は、199万円未満は16.0%であり、300万円以上は57.2%と約半数を占める（総務省統計局，2020）。また、女性正規雇用者の平均賃金は26.9万円に対し、女性非正規雇用者の平均賃金は19.3万円であり、女性間の雇用形態別の賃金格差は71.8である（厚生労働省，2020）。このように、女性間の雇用形態別の賃金格差が深刻であることがわかる。賃金だけでなく、女性非正規雇用者の約6割が2年未満の雇用契約期間で働いていることや（厚生労働省，2018）、正規雇用への転職率が約2割であることから（総務省統計局，2012）、女性非正規雇用者の就業継続が不安定であることがわかる。このように非正規雇用者は正規雇用者に比べ、年収が低く、雇用が不安定といった特徴がある。

非正規雇用者と正規雇用者では年収をはじめとする労働状況に違いがあり、それは生活水準に影響を与えると考えられる。これらを背景とし、本稿は女性労働者に焦点を当て、雇用形態の違いによってどのような生活の質の相違があるのかを明らかにする。

### 2. ケイパビリティ・アプローチ

本稿では、生活の質を分析するにあたり経済学者のアマルティア・センによって提唱されたケイパビリティ・アプローチを用いる。センは、主流派経済理論が前提とする、自己利益の追求のみによって動機付けられる合理的経済人（ホモ・エコノミクス）モデルや、効用最大化によって定義された合理的行動モデルを「合理的な愚か者」（Sen, 1977）と称して批判し、人々の選択の背後にある条件や境遇に目を向けて、個人の福祉を包括的に捉えようというケイパビリティ・アプローチを開発した。

#### 2-1. 機能、ケイパビリティ、資源利用能力

Sen (1992, 39) によると、生活とは「ある状態にいること (being)」や「何かをすること (doing)」から成る、相互に関連した機能 (functionings) の集合であると説明される。適切な機能は「十分な栄養を摂取できる」「健康である」等の初歩的なものから、「自尊心を持つ」「地域社会の生活に参加する」

等のより複雑なものまで多様にある。Senの主張は、機能が人の存在を構成するものであり、人の福祉(well-being)は機能の構成要素から評価されなければならないということである。

機能の概念と密接に関連しているのがケイパビリティ(capability)である。ケイパビリティとは、人が達成しうる機能の様々な組み合わせを表しており、どのような生活を選択できるのかという個人の自由を表す概念である(Sen, 1992, 40)。

人の多様性に配慮するケイパビリティ・アプローチは、所得、時間、人間関係等の生活資源を福祉に変換する能力の個人差を分析に組み込む。ここで重要になる概念が「資源利用能力」(石田, 2014: 後藤, 2017)である。Sen(1992, 38)によると、資源を福祉に変換する際に個人的・社会的特性が影響するという。例えば、持病がある人は、たとえその人が平均以上の所得を有していたとしても、健康な人より治療費が多くかかるため、所得を機能に変換する際に困難を抱えている場合がある。このように考えると、貧困に陥らないための十分な所得とは、個人の身体的特徴や社会的環境によって異なるため、生活に必要な機能を達成できているかという点を抜きにして、所得だけで貧困や暮らしぶりのよさを測るのは不十分であるといえる。本稿では「資源利用能力」という概念にも着目した検証を実施する。

## 2-2. ケイパビリティ・アプローチの概念図

ケイパビリティ・アプローチは、理論研究は盛んであるが実証研究は少ない。なぜなら、提唱者であるセンが実証研究の具体的な方法を提示しておらず、研究方法が確立していないからである。実証研究への応用には課題があるが、ケイパビリティ・アプローチの実証研究方法の開発は多様な研究領域において期待されている。

山本(2020a)は、ケイパビリティ・アプローチを用いて生活の質を分析するために、Sen(1992)や石田(2014)等を参考にし、人が資源と資源利用能力を用いてどのように機能を達成するのか、また、ケイパビリティと機能、資源と資源利用能力の関係性を説明するために概念図を作成した(図1)。図1に沿ってケイパビリティ・アプローチの概念を説明すると、特定の社会的条件・環境のもとに暮らす個人は、金銭、時間、場所、人間関係などの資源を持っている。その資源は、その人の能力、価値観、習慣などの資源利用能力によって、生活に必要な行動(doin)や状態(being)に変換される。この行動や状態を機能といい、機能の集合体をケイパビリティという。ケイパビリティ・アプローチは、機能の集合体であるケイパビリティから人々の生活の質を測ろうとする方法論である(Sen, 1993, 38)。機能の数が多いほど、自由に選べる選択肢の数は増し、ケイパビリティの幅が大きくなり、生活の質が高くなると考えられる。つまり、ケイパビリティとは自由に選べる機能の選択肢の幅を表す。人は機能の集合体であるケイパビリティから必要な機能を選択し、機能を達成している。

センが機能を分析指標とするのは、機能こそが人の福祉を直接表すからである。機能に対し、所得等の資源は人の福祉のための手段であり、また、生活満足度や効用は人の福祉の結果を表すものであることから、人の生活の質そのものの間にギャップが生じる。このように、ケイパビリティ・アプローチは、金銭や財の多寡ではなく財を用いてどのような機能を達成しうるかに着目する点、また、生活に満足しているかではなく本人の生活に必要な機能を達成できているかに着

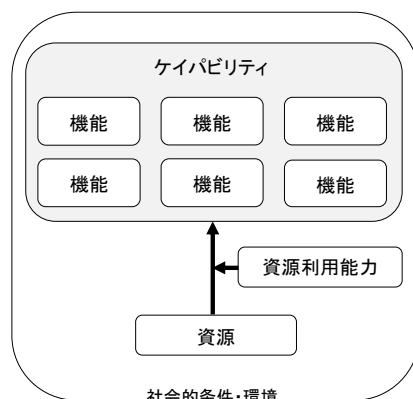


図1 ケイパビリティ・アプローチの概念図

目するという点で、従来の所得や生活満足度を指標とした生活の質の研究手法とは違う第三のアプローチと位置付けられる（三重野，1990）。機能に焦点を当てることによって、所得や生活満足度では十分に明らかにできない不平等や社会的差別を明らかにすることができる。

### 2-3. 自由、機能の達成可能性

センは自由を「本人が価値をおく理由のある生を生きられること」と定義している。そして、その自由を人々に平等に保障し、選ばうと思えば選べたはずの諸機能が不足していると判断された場合には、本人にとって価値のある機能を達成する自由を社会的に保障しなければならないと主張する（セン，2000）。加えて、センは「Xを行うこと」と「Xを選択し、それを行うこと」を区別し、達成された機能の背後にある選択の自由や選択の幅に着目すべきと述べている。例えば、断食とは物を食べるという選択肢がある時に飢えることを選択することであり、単に飢えている状態とは区別しなければならない。飢えている人の生活の質を検討する場合、その人が断食をしているのか、あるいは、十分な食糧を得る手段がないのかを問題にしなければならない（Sen, 1992）。つまり、個人の生活の質をケイパビリティで計測しようとする場合、本人が実際に選択し達成された機能だけでなく、達成されていなくても選択しようと思えば選択できる状態にある機能にも注目する必要があるということである。

ケイパビリティ・アプローチは、人がなぜそうしているのか、それは自由な選択によるものなのか、そこに制約や強制がないか、他の選択肢の機会がないのかを探ろうと試みるアプローチであるといえる。この場合、個人が持っている選択肢や機会は、機能の達成可能性であると捉えることができる（石田，2014）。自由に選べる機能の選択肢が多いほど、ケイパビリティが豊かであると評価するのだが、選択肢にはあっても実際には達成されなかった（選択されなかったため行動や状態となって表出されなかった）機能を第三者が客観的に認識することは困難である。本稿では、第三者による認識が困難とされる、選択しようと思えば選択できる状態にあるという機能の達成可能性をも分析の対象にするために事例研究を実施し、研究方法が確立していないケイパビリティ・アプローチの研究方法の一例を提示するということを目的としている。

### 2-4. 未婚女性非正規雇用者のケイパビリティの研究

山本（2020a）は、未婚女性非正規雇用者10名を対象とし、対象者が生活に必要としているにもかかわらず達成できていない機能は何か、どのような資源や資源利用能力が不足しているのかを明らかにするために、半構造化インタビュー調査を実施した。そこでは、対象者に自らの日常生活を振り返りながら機能の達成状況について話してもらい、その内容を分析している。分析の結果、女性非正規雇用者は「バランスの良い食事をとる」や「体力維持や健康のために運動する」といった身体的健康に関する機能、「自分の望む仕事に転職する」や「社会保障制度の知識をつけて将来に備える」といった将来の生活に関する機能が、生活に必要であると考えているにもかかわらず達成できていないことが示された。加えて、それらの機能が達成できない背景に、シフト制による不規則な勤務時間や長時間労働によって時間が不足していること、資源利用能力については、生活に必要と考える機能を実現しようとするモチベーションが不足しているという特徴が見出された。

しかし、山本（2020a）では、機能の達成可能性も含めたケイパビリティについての詳細を記述するには至っておらず、また、他の属性との比較分析も行っていないという課題があった。よって、本稿では、非正規雇用という働き方がケイパビリティにどのように影響するのかを詳細に分析するために未婚正規雇

用者と比較する事例研究を行う。

### 3. 研究目的

本稿の目的は、雇用形態の違いによって生活に必要な機能の達成可能性がどのように異なるのかを事例研究を通して明らかにすることである。そして、正規雇用者には達成可能であるが非正規雇用者には達成できない機能を示し、非正規雇用者であることによって、様々な機能の中から選択する自由がどのように制約を受けているのかを検証する。加えて、第三者によって客観的に認識することが困難とされる、選択しようと思えば選択できる状態にあるという機能の達成可能性も分析対象とすることで、研究方法が確立していないケイパビリティ・アプローチの実証研究の一例を提示することも目的としている。

### 4. 分析方法

#### 4-1. 分析対象となるケイパビリティと機能

山本（2020a）で非正規雇用者の生活課題が見出された「健康でいる」「人間関係を維持・構築する」「自尊心を持つ」の3つのケイパビリティを分析対象とした。これら3つのケイパビリティを構成する機能を、表1に示す。表1に示した機能は、山本（2020a）で実施したインタビューでヒアリングの対象とした調査票の項目から引用している<sup>2</sup>。

表1 分析対象となるケイパビリティとそれらの構成する機能

健康でいる（13項目）	人間関係を維持・構築する（18項目）	自尊心を持つ（15項目）
バランスの良い食事をとる	(友人と)旅行する	DVを受けた場合、助けを求める
生活リズムを保つ	愛情を表現する	仕事や生活に必要な知識を得る
年に1回、健康診断を受診する	喜びの気持ちを表現する	おしゃれする
医者にかかる	悲しい気持ちを表現する、泣く	怒りの気持ちを表現する、怒る
体力維持や健康のために運動する	怒りの気持ちを表現する、怒る	自分の望む仕事に転職する
心身の疲れを取れる十分な睡眠をとる	楽しいときに笑顔になる	ひとり暮らしをする
空調設備の整った部屋で暮らす	心の支えとなる人を得る	将来の夢を持つ
プライベートな空間を持つ	パートナーと協力して生活する	世間で恥をかかない程度の教養を持つ
部屋を掃除する	人脈を広げる	女性であることを理由に差別されない
洗濯した清潔な衣類を着る	親しい人に会うための交通費がある	TPOに合わせた服装をする
下着を定期的に買い替える	食事をしてコミュニケーションをとる	税金を払う
ストレス発散する	スマホでコミュニケーションをとる	仕事をして社会の一員だという実感を持つ
リラックスする	同じ趣味の人と同じ時を共有する	働きに見合った給料がもらえる
	職場の飲み会に参加する	収入を得る
	冠婚葬祭に出席する	年金を払う
	クリスマスやお正月を親しい人と過ごす	
	親しい人の誕生日をお祝いする	
	ボランティア活動する	

#### 4-2. 分析視角

インタビュー調査<sup>3</sup>の語りのデータを用いて、3つのケイパビリティを構成する機能の達成可能性と機能達成の脆弱性について分析する。まず、機能の達成可能性の検討方法は、雇用形態の違いによって各ケイパビリティを構成するどの機能の達成可能性がどのように異なるのかを確認する。次に、機能達成の脆

弱性の検討方法は、非正規雇用者、正規雇用者とも達成していると回答した機能について、確固たる資源や資源利用能力を有しているのであれば機能が達成が強靱であり、逆に、何等かの要因ですぐになくなってしまような不安定な生活資源によって機能が達成されているのであれば脆弱であると捉える。

これらの分析視角により、正規雇用者は達成可能であるが、非正規雇用者は達成できていない機能を示し、非正規雇用者がその機能を選択できないことや脆弱であることの背景にどのような制約があるかを探る。

## 5. 研究対象者

分析対象者は、本稿に先立って実施したインタビュー調査の対象者であった非正規雇用者の中から、非正規雇用者の対象者A（以下、Aとする）と正規雇用者の対象者V（以下、Vとする）を選んだ。Aを選んだ理由は、インタビューの語りの内容から調査対象者の中でAが最も生活に困難を抱えている様子が観察され、Aのケイパビリティをより詳細に分析する必要があると考えたためである。

次に、正規雇用者のVの選定理由について、本稿は雇用形態による生活の質の違いを明らかにすることが目的であり、雇用形態の違いによって最も影響を受ける生活資源は金銭であると考えた。よって、Aと所有する金銭資源の差が最も大きい対象者、つまり正規雇用者の対象者の中でも年収が高い対象者を選ぶことにした。また、未婚女性の生活は家族の人間関係資源の影響も大きいことから、同居者の有無の違いによって分析結果に影響が出ないようにするために、Aと同様にひとり暮らしをしている対象者が適切であると考えた。このように、雇用形態以外の属性は極力Aと揃えたいという理由に最も適合したのがVであった。以下では、AとVについて、彼女たちが所有する資源の内容に関する情報を中心に紹介する。

### 5-1. 非正規雇用者Aの紹介

Aは40代であり、都内（23区外）の賃貸住宅でひとり暮らしをしている。職場から住宅手当は支給されていない。隣県にある実家に父、母、弟が暮らしている。経済的に独立しており、実家からたまに車を借りることはあるが、それ以外の金銭的援助は受けていない。インタビューの語りから家族関係が良好といえる様子ではなかった。最終学歴は短期大学を卒業しており、司書の資格を取得している。仕事は市立図書館で司書をしている。1年単位の雇用契約を毎年更新する形で、現在の職場は勤続3年目になる。前職は別の市立図書館で4年間非正規職員をしていた。通勤時間は徒歩10分。年収は200～250万円、ボーナスなし。昇給なし。職場は非正規職員に対して副業を認めているが、司書の仕事は勤務時間が不規則で副業との勤務日程の調整が難しいため、Aは副業をしていない。勤務日は週4日で且つ残業は禁止されているためプライベートの時間の余裕はある。有給休暇を取得しやすい職場に勤めている。

### 5-2. 正規雇用者Vの紹介

Vは30代であり、都内（23区内）の賃貸住宅でひとり暮らしをしている。職場から住宅手当が少額支給されている。遠方の実家に父と母が暮らしている。お盆と正月の年2回は実家に帰省している。経済的に独立しており、実家からの金銭的な援助は受けていない。最終学歴は大学院卒であり、仕事は大手企業の営業職をしている。新卒で入社し勤続6年目になる。転職歴はない。通勤時間は電車で40分。年収はボーナス込みで500～600万円、昇給あり。勤務日は週5日で、繁忙期は残業をするが、閑散期は定時で帰宅できるため、慢性的な長時間労働はしていない。有給休暇を取得しやすい職場に勤めている。副業は禁止さ

れている。

### 5-3. AとVの属性比較

AとVは雇用形態の違いから年収に大きな差があり、Vの年収はAの約2倍である。Vはボーナスがあり、昇給があるがAはそのいずれもない。両者とも有給休暇が取りやすい職場に勤めているが、週4勤務で残業がないAの方が仕事以外に使用できる時間は多い。都内の賃貸住宅でひとり暮らしをしている点は同じであるが、Vは住宅手当が支給されている違いがあった。両者の属性を表2にまとめた。

表2 対象者の属性比較

	雇用 形態	年代	住所	同居者	居住 形態	勤務 形態	年収	ボ－ ナス	昇給	有給 休暇	住宅 手当
対象者A	非正規	40代	23区外	なし	賃貸	週4日	200~250万円	なし	なし	あり	なし
対象者V	正規	30代	23区内	なし	賃貸	週5日	500~600万円	あり	あり	あり	あり

## 6. 結果

「健康でいる」「人間関係を維持・構築する」「自尊心を持つ」という3つのケイパビリティを構成する機能の達成可能性にどのような違いがあるのか、また、同じように達成している場合でも、機能達成の脆弱性にどのような差異があるのかを確認していく。

### 6-1. 「健康でいる」を構成する機能の達成可能性

表1に示した「健康でいる」を構成する機能13項目について、Vは全てが達成可能であると語ったが、Aは10項目に留まった。Vは健康でいるための13項目全ての機能を選択しようと思えば選択できる状態にあった。一方、Aは「体力維持や健康のために運動する」「部屋を掃除する」「ストレス発散する」は達成できていないと語ったため、Vより「健康でいる」ための選択の自由が3機能分小さいと評価できる。

Aは「体力維持や健康のために運動する」について、健康のためにスポーツジムに通いたい、食費や住宅費よりも優先順位が低いスポーツジムの会費を払う金銭的な余裕がないため達成できていないと語った。「部屋を掃除する」は清潔を保つために必要な機能であるが、掃除機等の道具は所有しているが掃除が苦手であるという意識が達成を困難にしていた。「ストレス発散する」は精神面の健康を保つために必要な機能であるがAは自分の抱えるストレスの原因を認識しづらくなっており、また、自分に合ったストレス発散方法がわからないという理由で機能を達成できていなかった。

### 6-2. 「健康でいる」を構成する機能の達成の脆弱性

Aの機能達成の脆弱性が表れている機能として、「バランスの良い食事をとる」「医者にかかる」「リラックスする」に着目した。

「バランスの良い食事をとる」の両者の語りを比較すると、Aは最低限身体を動かすことができているという判断基準で達成していると述べていた。一方、Vは健康面や美容面をも考慮して、野菜やフルーツを摂取できているかというAよりも高度な判断基準で達成していると述べていた。このように同じように機能を達成しているという回答であってもAの達成基準はVよりも低く、脆弱である様子がうかがえた。

「医者にかかる」は、両者とも現時点では同様に健康保険証や診察料にかかる金銭を使用して達成していた。しかし、1年単位の雇用契約で働くAは、いつまでも健康保険の保障が続くとは限らないという不安を抱いていたため、「医者にかかる」の達成が脆弱であるといえる。

「リラックスする」については、普段どのような方法でリラックスしているのか尋ねたところ、Aは料理、読書、DVD鑑賞といったあまり金銭がかからない方法でリラックスしていると話した。他方、Vは休日に釣りやキャンプ、ギター演奏、友人と温泉旅行に行くことでリラックスしていると話し、両者のリラックスするための金銭のかけ方に大きな違いが表れていた。おそらくVはAが回答した金銭負担が少ないリラックス方法（料理、読書、DVD鑑賞）についても、本人が選択しようと思えば選択できる状態であると考えられる。逆に、スポーツジムに通うことを金銭的理由で諦めているAは、Vのような金銭的負担の大きいリラックス方法は選択しづらい状況にいると考えられる。このようにAとVではリラックスするために使用できる金銭に大きな違いがあり、Aの方がVよりも機能の達成が脆弱であることが見出された。

### 6-3. 「人間関係を維持・構築する」を構成する機能の達成可能性

表1に示した「人間関係を維持・構築する」を構成する機能18項目中、Aは14項目、Vは17項目が達成可能であった。Vは「人間関係を維持・構築する」ために17通りの機能の選択肢を持ち合わせており、そのの中から状況に応じて適切な機能を選択できていた。一方、Aは持ち合わせている機能が14であるということから、Aの方が「人間関係を維持・構築する」ための選択の自由がVより3機能分小さいと評価できる。Aは金銭的な負担がかかる機能、特定の他者と親密な関係性を築く機能の達成が見込めないという特徴があった。

まず、Aにとって「食事をしてコミュニケーションをとる」ことは、金銭的な負担が大きい機能であると捉えられており、可能であれば現状よりも頻繁に友人と食事に行きたいが、思い通りには達成できていないと語った。「お金があれば、自分からも気軽に誘えるかもしれない」と、一緒に食事をする友人や外食に出かける時間的余裕はあるが、金銭不足によって機能の達成が制限されている様子がうかがえた。一方、Vは友人や職場の同僚らと定期的に食事をしてコミュニケーションをとることができていた。

次に、Aは特定の他者と親密な関係性を築く機能である「心の支えとなる人を得る」「パートナーと協力して生活する」について、一人で自立していることが重要であり、他人を心の支えにしてはいけないと考えているため達成していないと語った。また、「愛情を表現する」についても、「配偶者や子どもがいるなら愛情表現は必要だが、私には必要ない」と語った。特定の他者と親密な関係性を築く機能は生活する上で必要であると考えられるが、A自身はこれらの機能の必要性を認めていなかった。しかし、Aは別の機能の語りの中では「もし、自分が正規職員だったら、結婚とか家を買うとか、将来のことを考えられるかもしれない」とも語っていた。この語りより非正規雇用という不安定な働き方は、将来結婚したい等の願望を抱くことを困難にさせていると解釈した。一方、Vは「将来、家庭を築きたいという夢があるし、できている」と自分の将来の夢を明確に語った。結婚や出産といった親密な人間関係の構築に関する機能の達成可能性についても、雇用の安定が重要であると示唆された。

「ボランティア活動する」ではこれまでとは逆に、Aは達成しているがVは達成できていなかった。Vは英会話の能力を活かして通訳のボランティアをしたいと考えていた。しかし、英会話の能力があるものの、ボランティア活動の情報をどこから入手すればいいのかわからず、また、仮に情報を入手できたとしても勤め先がボランティア活動を制限しているため、達成できないだろうと話した。一方、Aは年

に数回、被災地の特産品を売るボランティア活動をしていた。被災地への支援活動に興味を有していることやボランティア団体に連絡をとるという行動力を発揮することで達成していた。Aはボランティア活動をするを通して社会的居場所を持ち、地域社会における人間関係を構築することができていた。

#### 6-4. 「人間関係を維持・構築する」を構成する機能達成の脆弱性

両者とも友人、同僚、家族等との人間関係を有しており、人間関係資源の不足による機能達成の脆弱性は見出せなかった。

両者の相違点として、Aは「(友人と) 旅行する」について、国内旅行ならば年に1～2回はできるが、海外旅行は金銭的な負担が大きいいため達成できていなかった。一方、Vは国内旅行も海外旅行も定期的にできていた。金銭的な負担が大きい海外旅行ができないという点で「(友人と) 旅行する」の達成のAの脆弱性を確認できた。海外旅行をする場合、最低でも10万円程度は必要になってくる。Aは10万円を旅行に使用してしまうと、他のより重要度が高い機能が達成できなくなってしまうという心配があるため海外旅行はできないと語った。勤務が週4日であることや、有給休暇をとりやすい職場であるため旅行する時間は確保でき、一緒に旅行する友人もいるが、金銭に余裕がなく達成できていなかった。

一方、Vは「親しい人に会うための交通費がある」について、実家が遠方にあるため、帰省で飛行機を利用しなければならず大きな費用がかかるが、Vにとって両親と会うことは重要な機能であるためお正月やお盆休みに帰省しているという。

以上、「人間関係を維持・構築する」に関連する機能の達成において、飛行機等を利用する高額な交通費の出費という点でAの機能達成の脆弱性が確認できた。

#### 6-5. 「自尊心を持つ」を構成する機能の達成可能性

表1に示した「自尊心を持つ」を構成する機能15項目中、Aは12項目、Vは15項目全てが達成可能であった。Vは「自尊心を持つ」ための15通りの選択肢を持ち合わせており、その中から状況に応じて適切な機能を選択することができていた。一方、Aの持ち合わせている機能の選択肢は12通りであったことから、Aの「自尊心を持つ」ための選択の自由は、Vより3機能分小さいと評価できる。Aが達成できないと回答した機能は、「仕事や生活に必要な知識を得る」「自分の望む仕事に転職する」「将来の夢を持つ」であった。

Aは「仕事や生活に必要な知識を得る」という機能を必要だと考えており、この機能を実施するための時間は十分にあり、本は図書館で借りられるため金銭面も問題ないが、勉強するよりも寝たり、読む必要がある本よりも娯楽本を読んだりすることに時間を費やしてしまい、達成できていなかった。機能を達成するために必要な資源は持ち合わせているが、仕事や生活に必要な知識を得るために勉強しようというやる気(資源利用能力)を発揮できないために、生活資源を機能に変換できていなかった。一方Vは、仕事で必要となる知識は、職場が定期的に開催する無料の研修プログラムに参加することで学ぶことができていた。また、VはAと同様、近所の図書館の利用やYouTubeを見ることによって趣味で釣った魚のさばき方やギターの弾き方の知識を得ることもできていた。VはAが持ち合わせている資源に加えて、職場の社員教育という資源も有しており、自分自身の成長につなげることができていた。一方、Aの職場には非正規雇用者に提供される研修プログラムはない。職場の教育的投資の恩恵を受けることができる正規雇用者とその対象外とされる非正規雇用者では、「仕事や生活に必要な知識を得る」ための資源の豊かさに違いが表れていた。



「自分の望む仕事に転職する」について、Aは今よりも給料が高く、ボーナスや各種手当が付き、期限なく働き続けることができる正規雇用の司書に転職したいという希望も持っていた。しかし、司書の求人は非正規雇用職が多いという社会的背景のもと、正規雇用の司書の求人が少ないこと、また仮に正規雇用の求人があったとしても年齢制限があり自分は対象外で応募できないと語った。また、正社員として働いた経験がないことから正社員として働くことに自信が持てないようだった。このような本人にとっての不利な社会的条件や正規雇用で働くことへの自信のなさから、非正規雇用のままでいいと考えるに至り、具体的な転職活動はしていなかった。一方、Vは国際的に活躍できる仕事がしたいという希望を持っており、毎回、人事異動の希望調査では国際部と記入しているという。また、転職サイトに登録し、周囲の人から情報収集をするなど、国際的な仕事をするために行動を起こしていた。転職をキャリアアップの機会と前向きに捉えているVと、正規雇用の職に就きたいのに、自分自身に正社員になる能力はないと考えて非正規雇用者として働き続けているAの間に、尊厳を持って働くという点で違いが見出せた。

「将来の夢を持つ」について、Aは「1年契約で5年先がわからないような仕事のため、夢は持てない。長いスパンで人生を考えることができない。最低限、食べていけて待遇が下がっても図書館で働き続けられればいい、としか考えられない。もし、自分が正規職員だったら、結婚とか家を買うとか、将来のことを考えられるかもしれない」と述べている。一方、Vは「国際的な仕事がしたいという夢がある。今の職場の国際部に異動したいが、なかなか希望が通らないので転職することも考慮に入れて情報収集している。また、同じ価値観を持つパートナーを見つけて、家庭を築きたいという夢もある」とキャリアとプライベート両方の夢を語った。加えて、それらの夢はいつかは実現可能であると考えていた。「最低限食えることができ待遇が下がってもいいから今の職場で働き続けたい」というAの夢と、「国際的な仕事がしたい。価値観の合うパートナーを見つけて家庭を築きたい」というVの夢ではあまりにも質が違う。雇用の安定は、自分の将来に夢が持てるかどうかに大きな影響を与えることがわかる。

#### 6-6. 「自尊心を持つ」を構成する機能達成の脆弱性

「おしゃれする」は両者とも達成していた。本項では「おしゃれする」を「服を買う」という関連する機能に読み替えて機能達成の脆弱性を検証する。Aが「服を買う」のは、手持ちの洋服が汚れたり古くなったりした時であった。一方、Vは、シーズン（年4回）毎にトレンドの洋服を1着は購入し、おしゃれをすることを楽しんでた。両者ともに、清潔な衣類を身に着けることで自尊心を保つことができているが、毎シーズンのトレンドの洋服を身に着けるという意味合いも含めて自尊心を保つことができているVの方がより高度な次元で機能を達成できている。

「働きに見合った給料がもらえる」は、年収500～600万円のVの方が年収200～250万円のAよりも、給料の低さに不満を抱いていた。両者とも「同じ業界の人と比較すると、自分はいい給料をもらえている方だ」と言う語りは共通していたが、Vは「自分の働きぶりならもっと給料をもらえてもいいのではないかと語っていることから自分の働きに自尊心を持っている様子がうかがえた。一方、Aからは給料の低さに対する不満や、自分をもっと評価されるべきだという不満を示す語りは得られなかった。

Aのように年収200万円程度でも不満を言わず、「自分は他の人より恵まれている」、「ありがたい」と満足を示す語りは他の非正規雇用者の対象者からも観察された。このように、客観的に見て生活資源が不足している状態であっても本人は満足を示す傾向について、山本（2019）は女性非正規雇用者が適応的選好を形成することによって、自身の生活課題に気づくことができずに、ケイパビリティを拡大できていないのではないかと考察している。適応的選好とは、Elster, J（1983）が功利主義批判に用いた概念であり、

イソップ寓話「酸っぱい葡萄」の狐のように欲しいものが獲得できないとわかると無意識のうちにそれへの欲望が消えてしまう現象を指す。Sen (1992, 43) も功利主義の問題点の1つとして、対象となる人々の効用が適応的選好形成の所産であった場合、効用は生活の質を測る尺度としては不適切であると指摘している。適応的選好の影響を受けやすい人の例として不安定な雇用に就く人をあげている (セン, 1991, 76)。適応的選好形成による人々の言動の特徴として、嘆き、悲しみ、不満を言い続けなくなるということや、状況を急激に変えようと望む動機を欠いていること、小さな恩恵に大きな満足を示すこと等があげられており (Sen, 1992, 43)、200万円程度の年収に満足を示しているAの言動も適応的選好に当てはまる。低賃金、不安定雇用であるAは適応的選好によって、自分の可能性を見出せずにケイパビリティを拡大できない状態に陥っているのではないかと考えた。よって、Vよりも給料が低いにも関わらず、Aは現在の給料額に満足を示しているところから、Aの「働きに見合った給料がもらえる」という機能の脆弱性が表れていると考えた。

## 6-7. 分析結果のまとめ

ケイパビリティ・アプローチの概念図 (図1) に分析結果を当てはめて、正規雇用者と非正規雇用者の分析結果を対比し、両者のケイパビリティの幅の違いを示した (図2から図4)。選択しようと思えば選択できるが、脆弱である機能は点線で示した。また、選択できない機能は点線で示し、ケイパビリティの枠の外に出した。

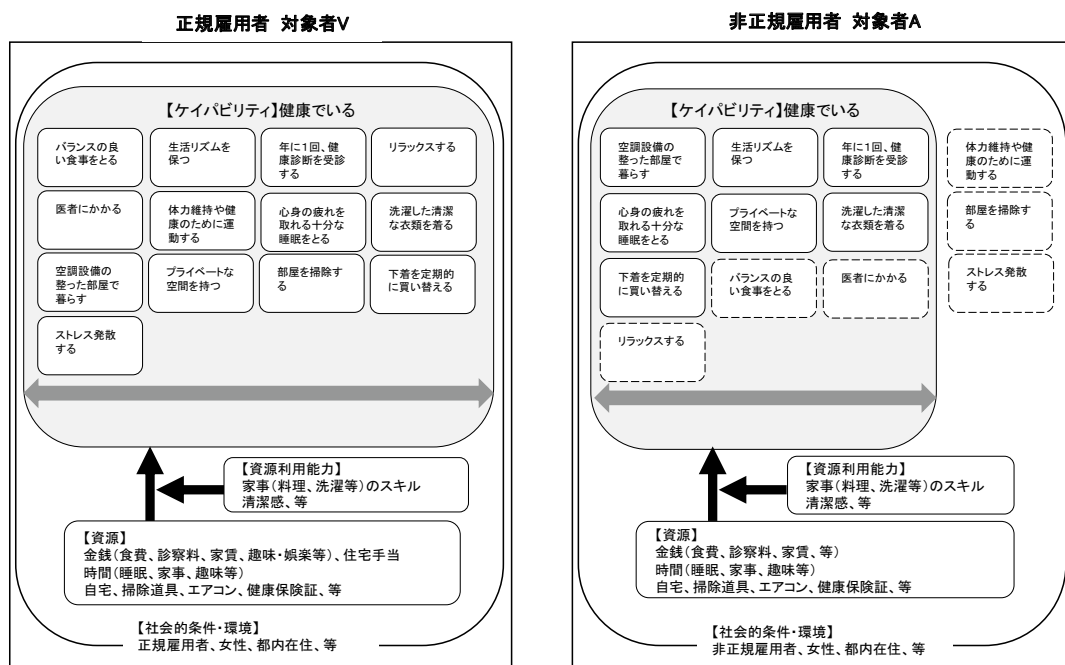


図2 「健康でいる」の雇用形態別比較

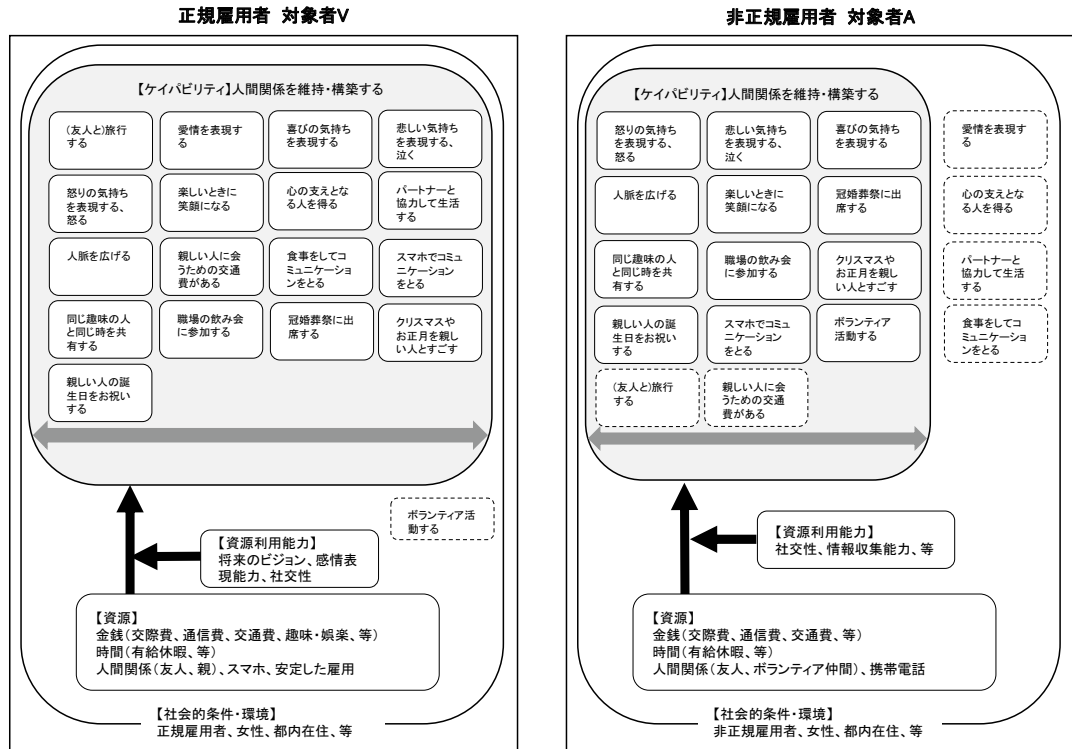


図3 「人間関係を維持・構築する」の雇用形態別比較

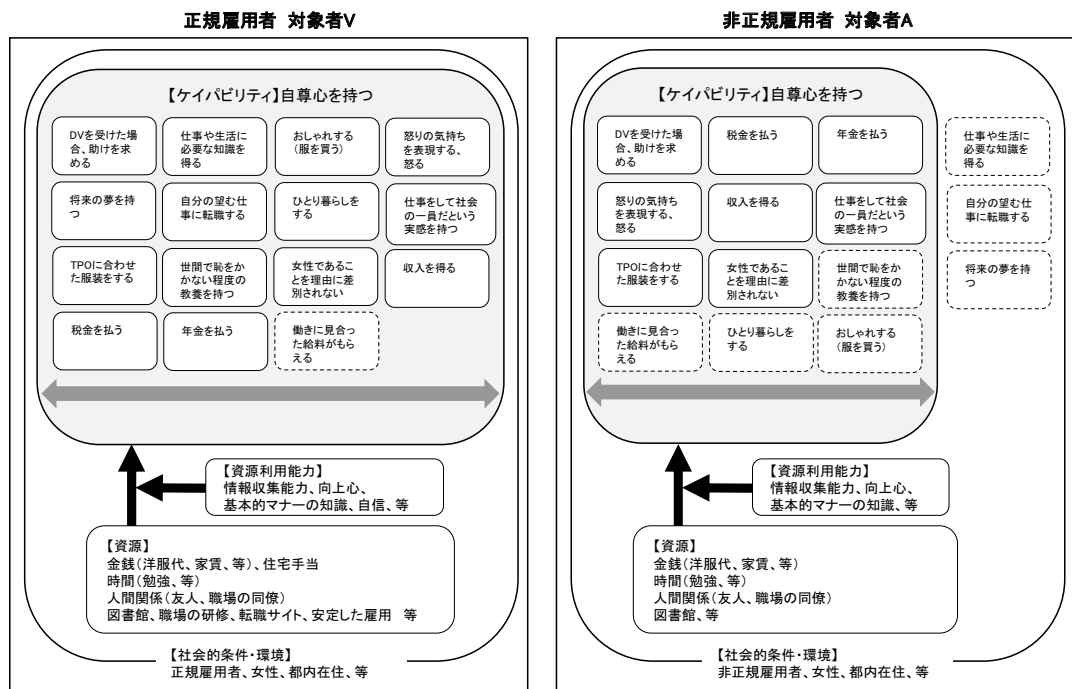


図4 「自尊心を持つ」の雇用形態別比較

## 7. 考察

### 7-1. 分析結果の考察

3つのケイパビリティを構成する機能の達成可能性や脆弱性について、雇用形態別に事例研究をした結果、所得の差による違いが多数見出された。しかし、所得の差だけではなく、Aは、職場の教育的投資、安定した雇用というような生活資源の不足、モチベーション、やる気、自信というような資源利用能力の不足、日本社会の労働環境というような社会的条件の影響を受けて、生活に必要な機能を選択できていないことが、ケイパビリティ・アプローチを用いた本研究の分析によって明らかとなった。Aが選択できない機能のほとんどは、正規雇用のVにとっては選択可能であった。雇用形態以外の属性はできる限り揃えて分析したため、Aが達成できない機能は、もしもAが正規雇用者ならば達成が見込めたのかもしれないと考えられ、不利な雇用形態によって生活に必要な機能を選択する自由が制限されていることが示唆された。

唯一、「ボランティア活動する」のみAが達成しVは未達成であるという逆向きのデータが得られた。Aは残業が一切なく、加えて、週の勤務日数が4日と労働時間が少ないため余暇時間を多く有していた。また、本人の行動力も伴って、ボランティア活動をすることによって、地域社会における人間関係を構築し、社会的居場所の確保という重要な機能の達成につながっていた。Vのような一般的な正規雇用者の働き方である週5日勤務で働く労働者は、所得は十分に得ることができたとしても、プライベートの時間的余裕を捻出できずに、社会的連帯に関するケイパビリティの実現を妨げられているのではないかという生活課題が見出された。

### 7-2. 分析方法の考察と今後の課題

本稿では、観察困難とされる機能の達成可能性を検証するために、非正規雇用者と正規雇用者の2事例を比較する事例研究を実施した。正規雇用者は達成可能であるのに非正規雇用者は達成できない機能を示し、機能を選択する自由が非正規雇用であることによってどのように制約を受けているのかを検証した。また、分析結果をケイパビリティ・アプローチの概念図(図1)を用いて図示することを試みた。ケイパビリティ・アプローチを用いたことによって、所得の差だけではなく、教育機会、安定した雇用、余暇時間といった生活資源やそれらの生活資源を機能に変換する能力としての資源利用能力に言及して生活の質の相違を示す方法論の一例を提示できたと考える。

本稿の分析は2事例のみの比較であり事例数が十分ではなく、非正規雇用者であることによってどのようにケイパビリティの実現に制約があるのかについての知見を一般化する段階には至っていないという課題が残る。課題は残っているのだが、ケイパビリティ・アプローチの分析単位は集団ではなく個人であるべきだという「ひとりひとりのケイパビリティの原理」(Nussbaum, 2000)という考え方があるように、個人のケイパビリティを詳細に記述することは、ケイパビリティ研究の発展にとって意義があると考えられ、本稿によってケイパビリティ・アプローチの概念に忠実に再現する実証研究の一例を提示できたことは一定の成果であると考ええる。

#### 注

- 1 女性非正規雇用者は2013年から2019年にかけて、1,299万人から1,475万人と176万人増加している(総務省統計局, 2020)。

- 2 インタビュー調査票の項目は、女性非正規雇用者の生活にとって必要な機能は何か、というテーマで実施したワークショップ調査の結果（山本，2020b）から、多くの対象者が必要と回答した機能や、筆者を含むケイパビリティ・アプローチの知識を有した複数人の研究者間で議論し普遍的で重要度が高いと判断した機能、先行研究（後藤等，2004；天野・粕谷，2008）から追加した機能で構成されている。
- 3 インタビュー調査の時期は、非正規雇用者への調査は2014年10～11月、正規雇用者への調査は2020年3～6月である。調査の実施時間は約2時間である。インタビューの語りは、同意を得た上で録音し、スクリプトに起こした。1名分A4用紙約15枚となった。調査実施にあたっては、お茶の水女子大学人文社会科学研究所の倫理審査委員による倫理審査に申請し、調査の実施の了承を得た。

## 引用文献

- 天野寛子・粕谷美砂子（2008）『男女共同参画時代の女性農業者と家族』ドメス出版。
- Elster, J. (1983) *Sour Grapes*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 後藤玲子・阿部彩・橘木俊詔・八田達夫・埋橋孝文・菊池馨実・勝又幸子（2004）「現代日本において何がく必要>か？—『福祉に関する意識調査』の分析と考察—」『季刊・社会保障研究』39、389-402.
- 後藤玲子（2017）『潜在能力アプローチ—倫理と経済—』岩波書店。
- 石田好江（2014）「生活経営学におけるケイパビリティ・アプローチの可能性」『生活経営学研究』49、3-9.
- 厚生労働省（2018）「平成30年賃金構造基本統計調査」  
（<https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2018/index.html>）2020/4/8.
- 厚生労働省（2020）「令和2年賃金構造基本統計調査 結果の概況」（<https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2020/dl/06.pdf>）2021/4/24
- 三重野卓（1990）『「生活の質」の意味』白桃書房。
- Nussbaum, M. (2000) *Women and Human Development*. Cambridge University Press, New York.
- Sen, A. (1977) *Rational Fools: A critique of the Behavioral Foundations of Economic Theory*. Philosophy and Public Affairs, 6, 317-344.
- セン, アマルティア（1991）「社会的コミットメントとしての個人の自由」（川本隆史訳）『みすず』358(1), 68-87.
- Sen, A. (1992) *Inequality Reexamined*. Oxford University Press, New York.
- Sen, A. (1993) Capability and Well-Being. In Nussbaum, M & Sen, A (Eds.) *The Quality of Life*. Clarendon Press, Oxford, 30-53.
- セン, アマルティア（2000）『自由と経済開発』（石塚雅彦訳）日本経済新聞社。
- 総務省統計局（2012）「平成24年度就業構造基本調査結果の概要」（<https://www.stat.go.jp/data/shugyou/2012/pdf/kgaiyou.pdf>）2021/4/24
- 総務省統計局（2020）「労働力調査（詳細集計）2019年（令和元年）平均結果」（<https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/dt/index.html>）2020/4/12.
- 山本咲子（2019）「適応的選好形成を用いた女性非正規雇用者が示す生活満足度の分析—ケイパビリティ・アプローチをもとに—」『経済社会とジェンダー』4、95-115.
- 山本咲子（2020a）「ケイパビリティ・アプローチを用いた生活主体形成の検討—未婚の女性非正規雇用者を事例として—」『生活経営学研究』55、35-44.
- 山本咲子（2020b）「女性非正規雇用者の生活実態を探る—ケイパビリティ・アプローチを用いた検討—」『人間文化創成科学論叢』22、235-244.